

P-338

全室個室は感染対策に有効か

足利赤十字病院 感染

○小林由美江、高橋 孝行、金子 博、川島千恵子、三田恵美子

【目的】医療施設で問題となりやすい耐性菌の多くは、医療従事者の手指や汚染された器具を介する接触感染が主体であり、MRSAなどの耐性菌に常に悩まされてきた。感染症コントロールには個室管理が理想である。しかし、個室が十分に多く多床室で管理せざるを得ない状況から標準予防策の徹底、特に手指衛生を強化するしかなくジレンマがあった。2011年7月、当院は病院移転を機に全室個室となった。旧病院は病床数614床、個室は60床だったのに対し新病院は病床数555床、個室449床となり更にすべての病室に手洗いが設置された。このような病院設備の変化に伴い感染症コントロールにどのような変化が生じたのかMRSAの検出状況から報告する。

【結果】2010年のMRSA検出率が平均4.91%だったのに対し、移転後2011年7月から2012年4月まで平均1.65%であり4月には0.83%まで減少した。またMRSAとMSSAの割合は2011年12月から逆転し、12月はMRSA36%、MSSA64%であった。しかし移転当初、手指アルコール製剤や手洗い用ペーパータオルホルダー、個人防護具ホルダーなどの設置が不十分だった期間にMRSAやESBLの小規模なアウトブレイクが発生した。

【結論】全室個室は感染症コントロールに有効である。しかし、手指アルコール製剤や手洗い用ペーパータオルホルダー、個人防護具ホルダーといった感染防止に必要な備品を適切に配置しなければ適切なタイミングで使用することはできない。そして、医療従事者が常に感染防止を念頭に置いた標準予防策の遵守やこれらの備品を使いこなすことで個室のメリットが十分に生かされると考える。

P-340

感染防止に向けた注射・点滴ミキシング方法の統一

北見赤十字病院 看護部

○渡辺 裕美、松澤由香里、浅尾 淑子、竹中 真美、古田 英子、神藤 章子

当院では院内感染防止対策委員会、感染防止対策チームのもと看護部に感染防止対策委員会を設置し感染防止に関する様々な取り組みを行っている。また病棟で実践業務を行う看護師を感染リンクナースとして各部署に配置し、感染管理指導・マニュアルや感染防止技術の周知・各部署でのサーベイランスなど様々な感染防止に関する活動を実践してもらっている。CDCガイドラインでは点滴調整について「経静脈的輸液製剤はすべて、薬剤部において、無菌操作を用いて層流フード(クリーンベンチ)内で混合のこと」とされている。当院では高カロリー製剤と抗がん剤は薬剤部でミキシングしているが、その他の注射製剤は一部の病棟を除いて各部署でミキシングしている現状がある。できるだけ清潔にミキシングできるよう環境と手順が大切となる。そこで薬剤のミキシング状況を調査するとミキシング直前にミキシング台を清拭していた部署は少なかった。ミキシング台の環境調査を実施しアルコール清拭の重要性と正しい作業手順が重要であることをリンクナースに意識付け、看護部の感染防止対策委員会で作成した薬剤のミキシングマニュアルを検討してもらった。感染リンクナースの意見を取り入れ自部署で実践してもらえよう薬剤のミキシングマニュアルを修正した。薬剤ミキシングマニュアルは各部署のリンクナースに周知を依頼。各部署でミキシング直前のアルコール清拭を実践するよう見直され、ミキシングにかかわる看護職員に対して、eラーニングの学習機能を活用しマニュアル内容の周知をはかることができた。注射ミキシング方法の統一へ向けた取り組み結果について報告する。

P-339

個人防護具は本当に適切に使用されているのか—着脱手順に関する実態調査—

足利赤十字病院 感染リンクスタッフ会

○片平 万希、打木 直子、丸山奈美枝、松本 恵子

【はじめに】個人防護具の適切な使用は、全ての医療スタッフが遵守すべき必須項目であり、不適切な使用は、汚染や感染を拡大させる原因となる。そこで、感染リンクスタッフ会では、個人防護具の適切な着脱方法に焦点を当て、演習を行うと共に習得状況についてアンケート調査を行ったので報告する。

【方法】個人防護具の正しい着脱方法を理解し習得することを目的に、事務部門を除いた670名を対象に実施した。演習は各部署の感染リンクスタッフが担当し、マスク・エプロン・手袋の着脱方法について8月と10月～12月の間で2回実施した。さらに演習による習得状況を把握するために演習1回目、演習2回目終了の約1ヶ月後にアンケート調査を実施した。

【結果】正しい着脱方法では、演習1回実施後に「知らない」と回答した人が全体の64.5%、2回目で42.7%だった。着用方法の不正解は30%以下で全てにおいて問題はなかった。マスクの脱ぎ方では、演習1回目で不正解が26%、演習2回目で19.6%、エプロンの脱ぎ方では、演習1回目で不正解が60.3%、演習2回目で45.5%、手袋の脱ぎ方では、演習1回目で不正解が68.6%で、演習2回目で42.1%であり最も頻繁に使用する手袋の脱ぎ方が適切に実施されていなかった。

【結論】日々の業務で頻繁に使用している個人防護具は、職種に関係なく「脱ぎ方に問題がある」ことが今回の実態調査から明らかになった。また、1回の演習では半数以上が着脱方法を習得できていなかった。このような実態から、特に使用後の脱ぎ方を繰り返し演習するなど日常的に訓練を行い、感染防止を強化していく必要がある。

P-341

感染リンクナースの育成に向けた感染防止対策委員会の活動と課題

北見赤十字病院 看護部

○竹中 真美、松澤由香里、浅尾 淑子、渡辺 裕美、古田 英子、神藤 章子

当院看護部には、院内感染対策委員会とは別に感染防止対策委員会があり、更に各部署に感染リンクナース（以下リンクナース）が配置されている。以前よりリンクナースに対しては感染対策の啓蒙活動と実践モデルを目的に小委員会を年3回開催していたが、身近な感染対策の問題点、ICTの内容がスタッフレベルまで浸透していない現状があった。そこで小委員会と連絡会議を年6回開催した結果、委員会メンバーと、リンクナースとのコミュニケーションが取れやすい状況、受身から積極的な感染対策に取り組む姿勢に変化が伺えた。また他部署との情報の交換・共有の場となり、自部署の問題点が明らかになるなど有意義なものとなった。しかし、リンクナースの経験年数により先輩看護師・看護助手に働きかけづらい、部署が抱えている問題点を自分自身の中で終わっている現状が浮き彫りになった、今後リンクナースが主体的に活動していけるようなサポート体制が課題である。